

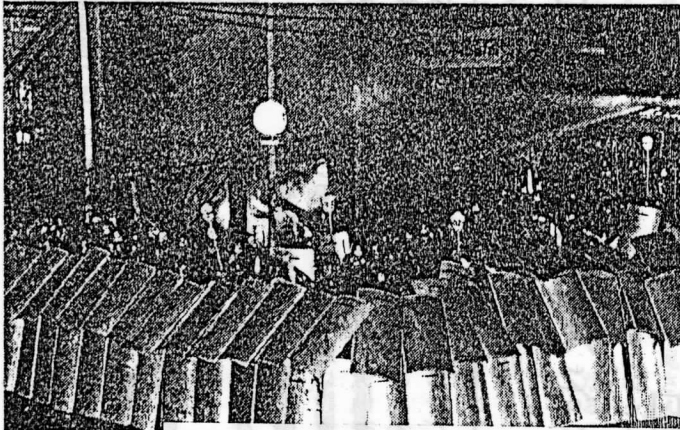
寄せ場学会通信

No. 1 2

1990年10月

連絡先
167 東京都杉並区善福寺2-6-1
東京女子大学松沢研究室気付
電話 03-395-1211

怒号・衝突・炎上する車



西成署前

一時は千

消防車

感が飛び交い、石や窓が飛び、二百夜、大阪市西成区蘇我駅
前(西成署前)の騒ぎ、時間を追って、労働者の数が増え、一時は
千を超える車体が三日月まで続いた。地域の警察の不祥事をきつた
に、機動隊の盾の列が死んだ。

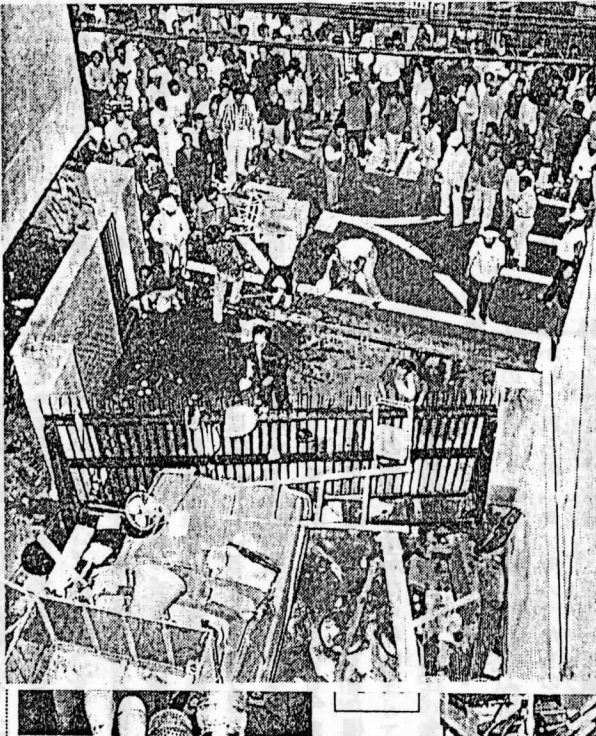
西成、一時1400人騒然

署前で投石

警官疑惑 説明求め労

警官
疑惑

労働者ら怒り



若者加わり興奮

警官が
土下座

午後十時、西成から北かい合った。興奮した群衆は、一足たねえなどおどろき、
「おわびばかり」などと叫び、警官を罵った。この日、
警察側も話し合った。この日、
警察側も話し合った。この日、

おわびばかり 大阪府警

「駅舎、食料品店に放火、略奪」
「騒動3晩、暴れ放題」

共に読売、一九九〇年十月五日の朝刊の見出しである。十月二日、大阪府警西成署の暴力団捜査担当の調査長が、こともあろうにその暴力団から現金を受け取っていたという記事に始まる一連の新聞報道は、日をおってこの出来事が「汚職事件」として深められてゆくにつれ、またこの出来事をきっかけとして起こった「労働者の騒ぎ」が激化し長期化するにつれ、次第にこれら二つの出来事の距離を隔て、またその重点を後者の「暴力性」に移行しつつある

急稿 寄

十月五日になって考えること

丹羽弘一

よりもこの出来事は他のどこでもない、寄せ場「釜ヶ崎」にこそ起こったことが重要なのである。
「釜ヶ崎」には、おそらくそこに足を踏み入れたことのない他地域の住民には想像もつかないほどの警察権力が集中している。地域のほぼ中央に存在し、小さな興奮をしのぐ動員力をもつといわれる西成署地域内を集団になって徘徊する制服、私服警官。そして地域内十数ヶ所に設置された監視カメラ。しかしそれらはまったく労働者の生活と安全を保証するためのものではないことを、誰もが知っている。決して捕まることがないシノギ（路上強盗）。被害に

には背を向けた「おわび」にはかなならず、府警の「釜ヶ崎」に対する姿勢をあらわすものといえよう。また西成署の警部補は三日、押し寄せた労働者に対し、「土下座」をして謝ったという。このような行為こそカマの怒りを侮辱するものであろう。酔った上でのけんかではない。誰も酔ってうさをはらしているわけではない。「釜ヶ崎」は労働者の街である。しかしそれだけではない。ここには女性も子供も生きていく。そして様々な人々が様々につながり合っていてカマでは生活している。この怒りはこれらの人々の生活の中から生じた怒りにほかならない。今回の「不祥事」はともかく、なによりも今ままでずっと自らの生活を土足で踏みつけ続けてきた権力に対しての地域全体の怒りにほかならない。

「騒ぎ」の勃発から三日たつ現在、その主体が労働者からじょじょに外部から集まってきた「暴走族」などの若者たちに変化しつつあるようにも思われる。しかしこれらの「ヨソモノ」たちの便乗を単純に非難することはできない。彼らとて自らの生を踏みこじめる学校教育、あるいは社会への、幻滅と怒りをもつてここに集まってきたのであろうから。この事態は皮肉にも八二年の横浜における野宿労働者と学生との極めて悲劇的な出会いを思い起こさせる。しかしそれとは逆に、まさにこのような事態の中にこそ異なった痛みをわかちあい、つながってゆく道筋が見えつつあるのではなからうか。これは困難な事態ではある。しかしこのような事態の中にこそ現在の、そしてこれからの全社会における寄せ場「釜ヶ崎」の意味を暗示しているようにも思われる。

ように思われる。確かに「汚職事件」はそれとして解決されねばならないし、それはむろん多くの他の「不祥事」にあらわれた大阪府警全体の体質と無関係ではない。しかしこれには少なからぬ危険がある。つまりこの出来事がその生じた場所から全く切り離され、単なる不祥事として埋没してしまったときこそ、この「騒ぎ」は一つの「暴動」として片づけられ、労働者の怒りも、その流された血も踏みみじられ、忘れられてしまうのではないだろうか。現在見取れる新聞報道の移行は、あたかもこのような「一般化」を予期しているようにも思われる。なに

あったことを訴えれば逆にあんたが悪いといわれ、まともに対策をたてようとしぬ。そしてなによりも労働者の移きを吸い上げる「シゴイチ」（ばくち）の健在！労働者の懸命の訴えに対し、真摯にむきあおうとするかわりに、常に力と暴力をもって対してきた警察権力。今回もその例外ではない。労働者に仲間の「不祥事」を一言でも謝る以前に盾と棍棒をもってあらわれた西成署に対して、労働者の投げけるひとかけの石はまったく正義の怒りであらう。大阪府警本部長は四日の府議会本会議において「おわび」をおこなった。これは全く当の「釜ヶ崎」

(にわ・こういち／大阪市立大学院生)

「寄せ場」と「その周辺」を研究する、ということはどういうことか？

そもそも語義自体までも問われているこの「寄せ場」とは何か？ 一体その場所は奈辺にあるのか？ 「その周辺」とは何処から何処までを指すのか？ それを研究する者とは何者か？

などなど、そのタイトルを書き記しただけでこれ程のクエスチョン・マークが飛び出す研究会もまた、珍しいのではないのでしょうか。研究対象、それ自体が茫漠としているようです。

釜ヶ崎を例にとつても、被差別部落、朝鮮人部落、或いは遊廓などと隣接して

いて、距離的にだけでなく、構造的に近接点を持つ港湾、競輪競馬競艇場なども

明らかに「その周辺」に含まれることと思ひます。そして「その周辺」がまたお互いに関係を有しているようですし、今現在に至る一分一秒以前の

「歴史」を遡及してゆくことになれば、その対象たるや紺青広大な大海原に撒いたジグソー・パズルの破片を一一拾い挙げていくようなものでしょう。西日本支部通信(9月1日付)に書いた文章を引用すれば、

《「周辺」と寄せ場の関係が喪失してない以上、常に「今ある」寄せ場が内包する問題意識と対照していかなければならないのは当然であ

起 提

共同研究

寄せ場とその周辺に就いて

下平尾直

る。それはひとつの労働学であり、社会学であり、文学であり、人間学であり、字義通りの「寄せ場学」である。》

ということなのですが、これほど抽象的な文章もないでしょう。

とりあえずの第1回は、9月15日支部例会が始まる前の2時間を利用して行なわれましたが、集まったのは池田浩士さんと和田研三さんを除けば学生が4人でした。研究対象・方法・今後の展開などに就いて様々な意見が出たのですが、まず数

だ、ということとは強調しておいても良いと思ひます。

前述の通り、学生など割に若い世代(?)が多く、これから続けてゆけば、今までの概念や体系と違った新しいものが発見^みかるかもしれず、更に言えば、京阪神中心のこの会以外にも、東京を始め、各地でこういった研究会が生まれていって交流会など出来るようになれば、という希望や夢想(でなければ!)もあるようですので、とにかく何年か続けばジグソー・パズルの一破片位は拾えるのではないかと、とも考えています。仲々地道な活動のようです。

最後につけ加えておけば、ばく自身、嘗て研究会など主宰したこともなければ、

回、寄せ場の大概を知識として得てゆこう、ということです。(例えば第2回目は「釜ヶ崎ストーリー」(ブレンセンター)と、「やられたらやりかえせ」(田畑書店)から「土方学入門」、この2篇の読後感と映画「山谷——やられたらやりかえせ」を観ての意見交換を行ないました。)

また、フィールド・ワークも現在の寄せ場を知る重要な方法として積極的に行なうてゆくことになるはずですが、そして、徐々に細分化して各個人なりグループで分野別に研究することになるかもしれません、さて、どうなることか。試行錯誤

この学会でも初めてというこの研究会がどうなるのか不安でもあるのですが、色々な希望も湧いてくる、という点では仲々の楽^た天家^{てんか}のようです。そして以前支部例会で「寄せ場が何だか全然ワカラナイ」と両手を挙げたことさえあることを正直に告白(?)しておいて、多くの方の御参加御教示をお願い致します。ひとりでも多くの方に参加して頂けたら、それだけ得るものも多いことでしょう。

これからの「寄せ場とその周辺」に御注目下さい。(しもひらお・なお/関西大学生)

学習白会報告要約

この夏、東西両支部では二度ずつ学習会を開いた。大テーマは東日本が「都市論」、西日本が「寄せ場の存在規定・本質規定」。全部掲載したかったが、諸般の事情で原稿が間に合わなかった。今回は、七月二十九日西日本支部学習会の報告者である平川茂さんに、報告内容を要約していただいた原稿のみを掲載する（編集部）。

「寄せ場」とはなにか — 議論の整理 —

平川茂

寄せ場の主体性をつくりだすためにいま必要なのは、研究主体としての当の寄せ場とはなにかをあらかじめにすることではないか、という雑賀氏の提起をキッカケにして、自分なりに寄せ場とはなにか考えてみようと思ひ報告させてもらった。

てがかりを下田平裕身氏の議論（「雇用変動時代の寄せ場」、「寄せ場」1、一九八八）に求めた。氏は、高度成長期以後の一般社会の大きな変化——雇用市場の流動化・多様化によって、正規雇用でない雇用領域の巨大な広がりが見られるようになった——にともなって派遣社員、パート、社外工などの非正規雇用者がつくる「寄せ場にならない寄せ場」が形成されてきたから、寄せ場像もかつてのように

鮮明ではなくなった、という。そこで、氏は寄せ場概念の拡大・変容を提案する。

では、それはどのような方向でなされるのか。それを考えるために、加藤佑治（「現代日本における不安定就業労働者」（上・下）御茶の水書房、一九八〇・一九八二）、伍賀一道（「現代資本主義と不安定就業問題」御茶の水書房、一九八八）、青木秀男（「寄せ場労働者の生と死」明石書店、一九八九）3氏の議論を検討した。

加藤氏にあっては、寄せ場は、全産業における最下の「ベルト的階層」たる日雇労働者の「中継地」とみなされることによって、また伍賀氏にあっては不安定就業階層内部の「格差」を問題にしようとする

る志向がある点で加藤氏と区別されるとはいえ、いまだそれは志向にとどまっているゆえ、寄せ場の問題は不安定就業階層の問題に解消されている。

他方、青木氏は、寄せ場と「寄せ場にならない寄せ場」とは、①寄せ場労働者を「流動性」「単身性」「低熟練性」によって規定することを通して、寄せ場労働者が他の種々の労働者によって差別される存在であることをあきらかにし、②そのような寄せ場労働者からなる寄せ場に、先の寄せ場労働者の存在規定に対応する行動・思考・心性の特定のスタイル——文化を仮説することによって、質的に異なるものとみなす。

寄せ場独自の課題を提起し説明すべき寄せ場学にとつて、寄せ場概念の拡大・変容がどの方向でおこなわれるべきか、いまやあきらかであろう。ただ、そのさい次の2点を考慮することが必要だろう。

①一般社会で激烈に闘われている「能力主義的競争」——個人の評価にあたっては、たんに「業績」ばかりではなく「性格」「協調性」「やる気」「体力」なども重視される（むしろ、後者こそが問われるというべき）ような競争であるゆえに、「敗者」はその「敗北」の責任をすべて自分に負わせざるをえなくさせられる——を寄せ場差別論にどうとりこむか。

②一般社会の文化との関係をより明確にする方向で、寄せ場の文化を説明するにはどのような（青木氏の「ホコリーミジメ」論をもふまえた）枠組をつくらればよいか。

（ひらかわ・しげる／釜ヶ崎資料センター）

運営委員会報告

九月八、九日の両日、広島市において運営委員会が開かれました。以下、報告いたします。

第一日(9・8/広島市西隣保館)

学習委員会・本流討論委員会

初日は八日午後三時三十分より、松沢哲成さんの今総会での研究発表「対外侵略と寄せ場・日雇労働者」をめぐる学習会が行なわれました。

まず総会発表の目的と梗概について、松沢さんが「従来の研究でも個別的な項目についてはそれなりに深いものがあったが、たとえば日雇労働者が対外侵略にどのように動員され、先兵とさせられていったかなどは、ほとんどふれられていない。今回の発表は論点をひととおり並べることによって、一九三〇年代から四〇年代にかけての日本社会の流れを追うのが主眼だった。だから発表で行なったアプロ

チの仕方や視点の違いに対しては、異議が出されることをむしろ期待した」と説明しました。

これに対して松繁逸夫さんは「日雇労働者が組み込まれたという在り方が、外的圧力だけに重点を置いており、しかもそれが破綻したと述べている。国家が日雇労働者を組み込んだ要因と失敗した要因との関連性が不明ではないか」としたうえで、今発表の枠組みに関する疑問をいくつか提示しました。

続いて中山幸雄さんが「国家が組み込みに成功した・失敗したという視点ではなく、日雇労働者が歴史主体として存在したことを明らかにする必要がある。強制的な動員は闘いの結果としてあったこと、そして敗北状況のなかでも闘いがあったことを前提にしないと、いまに至る労働運動が見えないのではないか」と問題提起を行ないました。ここで再び松繁さんが「敗北というとき、その推移を確認すべきだろう。この発表では前史的なものが欠けているのではないか」と疑問を呈しました。

さらに池田浩士さんが「戦時体制の進行というとき、組織労働者の運動の変貌と日雇労働者の運動の変貌とは、おのおの関連を持って進んだはず。中山さんの発言は、戦後型労働が(産報化)したアナロジーとして戦前・戦中期をとらえ、それとは違う闘いが日雇労働者にあったことを明らかにしようとするものでは」と発言しました。

以上でひとまず問題点は出揃い、討論すべき方向が明らかになるはずだったので、司会(それは報告者の私です)の交通整理が悪く、以後はやや拡散した討論となりました。

それでも興味深い発言がいくつか出され、「今後、

日雇労働者が動員されるとしたらどのような配置されるのか、に関心がある。合理化・機械化が昔と比較にならないほど進行している現代では、(侵略への動員を許すな)といっても、そうした動員の必要があるのか」「いや、動員の手法には変わるものがないのでは。現在でも、ひとつの方向に向かって締め付けや労働力配置がきっちり行なわれようとしている」といった討論が交わされました。

午後五時からは交流討論会に切り換わり、広島の日雇労働者をめぐる状況や高松の労働事情などについて、意見交換が行なわれました。

第二日(9・9)広島キリスト教社会館

運営委員会

二日めは午前十時三十分より運営委討議が行なわれました。討議事項は次のとおりです。

①学会が制作する「フォー・ビギナーズ寄せ場」のイメージ(本が作り出す寄せ場のイメージ)について意見が交わされました。具体的には制作進行が遅れています(もちろん急げばいいというものではありません)が、担当者の中西昭雄さん、事務局の松沢さんを中心に今後も詰めていく予定です。

②聞き取り調査を(とくに釜ヶ崎において)行なう。これについては16ページを参照してください。

③「即位の礼ー大嘗祭」に対して反対声明を出す。④次回運営委員会は十月二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八日の両日、東京(山公労労働者会館)において行なう。以上です。

(報告・和田)

九州から広島へやってきて

相原一博

この原稿を書こうとしている時、10・2の釜ヶ崎の事件をTVが報道していた。

西成署の悪徳警官への怒りがあらわされた事柄だと思わされるが、奇妙な時間設定を思わさせられる。半年間、開催された「花博」が終わった直後、皇太子が帰京した直後、そして、アキヒトの即位の礼、大嘗祭を前に、破防法なる言葉がチラついてくる。

釜ヶ崎の事件をマスコミは暴動と伝える。そうなのだろうか。マスコミはなおも扇動する。彼らは市民？づらしながら、「過激派が石を投げていた」とレポートしていた。寄せ場の状況は、天皇代替りの季節の中できびしさを増していくだろう。

私は、この3月まで福岡県大牟田市に10年間住んでいたのだが、そこでの生活の中から

「寄せ場」との関わりが始まった。

大牟田は、あの魔の炭坑、三井三池炭坑のあるところだった。歴史に刻みこまれているように、天皇の歴史とともにふくれあがった旧財閥、企業、日本の近代化の中で、犠牲にされてきた多くの働く人々。囚人坑夫、与論島から強制的に連れてこられた人々。朝鮮から刈られるようにして連れてこられ、牛馬のごとく働かされた人々。そして、それらの人々は炭坑の中に今も眠っている。

1960年の三井三池の闘い、労働者が「人として生きる権利」を求めて闘った闘い。そこで、企業は暴力団を使い、労働者を殺した。久保清さん。彼の殉難碑に刻まれている一つの詩。

「やがてくる日に 歴史が正しくかかれる

やがてくる日に 私たちは正しい道を進んだといわれよう 私たちは正しく生きたといわれよう 私たちの肩は労働でよじれ 指は貧乏で節くれだっていたが そのまなざしは まっすぐに 美しい未来をゆるぎなく みつめていたといわれよう はたらくもののその未来のために 正しく生きたといわれよう 日本にはたらく者が怒りにもえ たくさんの血が 三池に流されたといわれよう」

三井三池の闘いで、多くの失業者が出た。企業の論理の中で、労働者は切り捨てられていった。その合理化がもたらしたものは何だったのか。

3年後の1963年11月3日の三川坑炭じん爆発による458名の死者と、今も苦しみにある800名を越すCO中毒患者。その後、炭坑は人を殺していった。そして閉山のくり返し、あふれる失業者。これが日本の近代化、戦争、高度経済成長。名も刻まれていない多くの墓石が炭坑に立っている。

釜ヶ崎に初めて行った時、アオカンしていた労働者の故郷が「大牟田」と聞いた。炭坑、寄せ場、労働者がそこでは連なっていた。

12年間の九州での生活の後半、福岡日雇労働組合と関わりをもち、日雇い夏まつり、福

岡越冬闘争に参加する機会を得た。闘う労働組合との出会いだった。

アオカン生活を強いられていたAさんとの出会いもあった。彼は、度重なる中学生の投石に抵抗した人だった。誤って中学生を負傷させ、警官に抵抗し負傷させたとされ、起訴された。誤って負傷させたというのは権力とか小市民、マスコミの言葉であって、正当防衛なのだ。警官の件にしても、むしろ暴行を働いたのは、捕りおさえにきた警官の方だった。

裁判を通し、権力、行政の日雇い労働者差別、寄せ場差別を目的あたりにさせられた。差別裁判だった。拘束者が何人も出、また支援にきた車イスの障害者Bさんは、車イスに乗っているということで退廷させられた。

福岡では今年の秋(10/21)、国体がある。そこに天皇がくるということ、アオカンを強いられている労働者が、夜なかに県警及び所轄署の警官から、たたき起こされ、顔写真撮影と指紋採取をされるといふ人権侵害を受けた。日雇い労働、寄せ場は、その対極として天皇がある。天皇制を保っているこの国の構造そのものが、とわれている。

九州での生活を終え、広島へやってきた。

広島では「平和」という言葉を聞く。しかし、まやかしの、現象面での平和なのだ。被爆都市で、もちろん反戦の願いは民衆ひとりひとりにある。世界に平和を訴えてもきただろう。しかし、この都市そのものの歴史が検証されていない。

「軍都」として日本の近代化、侵略の歴史を、この都市は支えてきた。大本営が設置され、首都さえも一時期、広島へ移ってきた。それは明治天皇が直接戦争の指揮をとるためだった。軍需工場をもち、強制連行の朝鮮人が働かされ、被爆していった。何故、彼らが被爆したのか。その何故の歴史が、「平和公園」「資料館・記念館」にも記されていない。「平和公園」の川のむこうに「韓国人原爆犠牲者慰霊碑」が立っている。「死んでからも差別されるのか」という叫びが続いている。

広島の労働を考える時、軍との関係は無視出来ない。朝鮮人労働者のことをきっちり心に刻む必要がある。そして、現在も研修という名のもとに、東洋工業ほか、企業に韓国人労働者が働かされている。日本人労働者より悪い条件、低賃金で。

広島で寄せ場との直接的な出会いは、まだない。自分の怠慢を思わされる。ただ「野宿

労働者の人権を守る広島夜まわりの会」がある。学生、シスター、神父、牧師、市民が関わっている。労働者支援のグループだが、若い人が多い。希望がもてる。

毎月2回、冬期は毎週、広島駅、中央公園、平和公園ほか広範な地域で夜まわり、医療相談等をされている。先日は、現場で労災を負ったMさんの労災補償を勝ちとられた。この会は「山谷——やられたらやりかえせ」の上映活動に参加した人たちによって作られたと聞く。会が発展し、当該労働者がその運営に参加し、組合が結成されることがのぞまれる。

広島には日雇全協、寄せ場学会の中山さんがおられる。彼の当地での影響は強い。中山さんとの出会いの中で、労働、寄せ場の事柄を教えていただいている。広島の労働単価は福岡よりもいい。しかし、今後、広域暴力団山口組の進出で、労働状況も変わってくるだろう。

4年後のアジアオリンピックが当地で開催され、現在施設が建設されているが、そのことが現地の日雇い労働者とどれだけの関わりをもつことか、さだかでない。

(あいほら・かずひろ／広島キリスト教社会館牧師)

「労働者らしい労働者」の 原像を求めて

—— 抜書メモ ——

松繁逸夫

一九七四年に「アンコをつくるアンコ」の雑誌として発刊された『労働者渡世』の第四号に、「なぜ「労働者」というコトバをつかうのですか。それは差別用語ではないのですか。」という一読者からの質問が紹介され、作り手の側からの返事も同時に掲載された。《私（私たち）はそういう議論は好みません。ただ「おれたち労働者も人間だ」「おれたちも労働者だ」と今はあまり言いたくないのです。「おれたち労働者こそ労働者らしい労働者であり、人間らしい人間だ」とドーンと胸をはっていいたいのです。続きはまた。》

しかし、直接に続きらしいものは、今日にいたるまで書かれていないように記憶している。「おれたち労働者こそ労働者らしい労働者」ということの、明瞭な形での根拠は、示されていないといえる。ただ、「労働者」（しんどくて、汚れる、あぶない、安くて、不安定な、単純肉体労働をする人々）の歴史を、「渡世」に連載した水野阿修羅は、その歴史を、奈良時代の賦役労働―徭役労働から説き起こし、「こうした徭役労働―強制労働や重税をのがれるために多くの人が逃げだした。こうした人々は当時初めて作られた戸籍「庚牛年

籍」を脱けたため、住む所としては誰のもでもない「河原」に住みついた。こうして京都の鴨川の河原には多くの人々が住みつき、その日暮らしのため、金になるどんな仕事でもやった。》と紹介し、その後の連載も含めて現代までの連なりを示しており、いわば賃労働の原形を引き継ぐものとしての一面から、「労働者らしい労働者」の根拠を提示しているといえなくもない。（寺島珠雄篇『労働者渡世』風媒社刊、一九七九年第二刷）

ちなみに、《日傭労働生活の間に於いてその大半》が書き上げられたという吉田英雄著『日稼哀話』（平凡社刊、一九三〇年）においても、《日本の労働史の大部分は農業労働者か然らざれば日傭労働者の歴史であった》とし、その歴史を（王朝時代の労働者……今日の所謂自由労働者に近いところの傭定夫、丁役夫、雑徭夫、其他）に触れるところから説き起こしている。

沖繩・嘉手名基地ゲートで焼身決起した船本洲治は、《山谷においてルンプロといえは、せいぜいダニの如くとりつき甘い汁を吸っている。ごく一部の、手配師と暴力団員と売春婦ぐらいのものである。マルクスは「宣言」においてプロレタリア

ートを「仕事のある間しか生きられず、そして、その労働が資本をふやす間だけしか仕事にありつけない」者といっている。現代においては、毎日毎日雇われ、その日のうちに失業してしまふ我々最下層労働者こそが、まさにマルクスのいう「鉄鎖以外何も失うべきものを持たない」典型的な純粋なプロレタリアートであることを宣言しよう。》と、「山谷解放闘争に強力な支援を！」の呼掛文の中で書いている。船本のいう山谷労働者こそが「最も労働者らしい労働者」であるという意味は、革命の主体勢力としてのそれであることは明らかであるが、もう少し文学的な表現もしている。

《山谷が資本主義社会の一切の矛盾の集約点、ふきだまりであるということは、この世で一番醜いものがここにかき集められているということの意味しているのだ。したがって山谷労働者は、この世で一番美しいものを獲得することができると、何故なら状況を乗り越えない限り、自らを乗り越えることはできないからである。》と……。

（船本洲治遺稿集『黙って野たれ死ぬな』れんが書房新社刊、一九八五年）

ちなみに、船本が引用しているマルクスの代表的著作として知られている『資本論』第一巻第二篇第四章第三節「労働力の売買」には、次のような文がある。《労働力の所持者と貨幣所持者とは、市場で出会って互いに対等な商品所持者として関係を結ぶのであり、彼等の違いは、ただ、一方は買い手で他方は売り手だということだけであって、両方とも法律上では平等な人である。この関係の

持続は、労働力の所有者がつねにただ一定の時間を限つてのみ労働力を売るといふことを必要とする。なぜならば、もし彼がそれをひとまとめにして一度に売ってしまうならば、彼は自分自身を売ることになり、彼は自由人から奴隷に、商品所持者から商品になってしまふからである。》（『資本論』大月書店版、一九六八年）

日本の労働契約の前提である終身雇用——それは事実の問題であるより社会通念上の理解といふべきものであるが——と、この文を重ね合わせると、日本の常備労働者は「ひとまとめにして一度に売って」おり、奴隷に近いといえなくもない。

日々自己の労働力を売る日雇労働者が、最も自立した労働者、労働者らしい労働者といえよう。

蛇足ながら、「資本論」のこの部分への注目の切っ掛けは、偶谷三喜男の『労働経済論・第二版／経済学全集二二』（筑摩書房刊、一九八八年初版一〇刷）によるものであるが、同書では（『資本論』第一巻第一篇でこの問題をとりあつかい、労働力の商品としての特質をその所有者である労働者との関連で二つあげている。》として、先の引用部分が掲載されている。ただし、訳文は《もしかれがそれをひとまとめにして一回かぎりで売らなければ、かれは自分自身を売るのであり、自由人から奴隷に、商品所有者から商品に転化するからである。》というように、大月版とはやや異なっている。ちなみに、当該部分に対する偶谷の解説は次のようになっている。《すなわち、（資本論においては、）労働者は労働力の所有者であり

販売者であるかぎりにおいて、したがって、労働力の分析に必要なかぎりにおいて、問題とされるにとどまる。——略——マルクス経済学の影響を強く受けた日本の労働問題研究においては、理論的研究の対象は「労働力」にむけられ、それゆえにまた、経済学的が可能となり、単なる労働問題の叙述や、社会政策の人的理解などを超えることができたのである。その意味で、日本で形成された労働問題研究の科学的体系は、「労働力」の経済理論であった、といつてよいであろう。》

ここで、冒頭部分で述べたことの一部訂正を行う。

水野阿修羅の「渡世」での仕事——「労働者の歴史」の連載——について、《いわば賃労働の原形を引き継ぐものとしての一面から、「労働者らしい労働者」の根拠を提示しているといえなくもない。》としたが、実は、水野は賃労働という言葉を使っておらず、「昔、労働者の仕事は誰がしていたか」という表題のもとに稿を起こしていたのだ。ようするに、仕事の内容に注目して、現在までの連なりを見たのであった。なぜ、このような訂正をここで行うのかといえば、労働者でなく労働力のみを研究対象とする労働問題研究の分野では、賃労働の創出が、江戸時代中期以降とされているのをおもひ出したからである。

歴史学研究会編『明治維新史研究講座第五卷』（平凡社刊、一九五八年）には、津田真澄による「賃労働の創出とその性格」と題された一章があり、日本における賃労働に関する研究の総攬的紹

介と検討が行われているが、それによると、庄司吉之助が（『明治維新の経済構造』（昭和二九）において、賦役労働の債務労働化（労働力の債務額としての評価の成立）、さらにその内部での居消（労働力の価値評価成立）の成立から給金化、およびその年季債務労働化への進展が、これを越えて賃金労働者の発生へ進み、その内部において年雇から季節労働、さらに日雇労働へと賃労働者の本格的形成がみられ「貫徹している太い線は賃金労働者の発生への方向である」ことを実証した。》以外の研究のほとんどは、大河内一男の「出稼型賃労働」——《封建的土地所有範疇に属する日本農業の維持のために農村の家計補助的賃労働が創出・発展したことを主張した》——に代表されるごとく、江戸期のマニファクチュアの成立・発展と賃労働の発生をからめて論じ、本格的賃労働の成立を明治期とするものである。

「研究史上最初の体系的業績」とされる偶谷三喜男の『日本賃労働史論・第二版』（東京大学出版会刊、一九七五年）は、その序章において、《今日社会を動かす重要な要因が労働者階級であることは、明々白々たる現実であり、資本主義の運動過程は賃労働の究明なくしては分析されえない。とすれば今日賃労働の歴史的分析、その生成・蓄積・陶冶の過程の分析も重要な不可欠な研究課題ではないであろうか。のみならず、理論的にも、賃労働は資本と並ぶ資本主義の基礎範疇である以上、範疇自体の生成・展開過程とそれを貫く運動法則とを実証的に究明することは今日不可欠の課

題ではあるまいか。」と述べ、《第一章では封建体制、なかんずく封建的土地所有の解体過程の中から、どのようにしてプロレタリアートが発生してきたかという過程を、解体過程の特殊性、したがってそこに形成されたプロレタリアートの特殊性に留意しつつ分析し》、その結果を、《農民層の分解の中から、賃労働は次の三つの形態において徐々に形成せられた。第一は農村マニユの展開を基盤として、農村地帯に生じた賃労働需要に対し、周辺農村の中貧農の中から折出された賃労働であり、第二は中貧農の過剰な労働力が自己の周辺において雇用の機会を見出しえないため、単身遠隔地の工場・鉱山その他へ出稼ぎする場合であり、第三は第一、第二の形態が何れも農家の家計補充として現れるのに対し、農村における生活の破綻から一家をあげて、あるいは一家離散して都市下層に流出し、そこで賃労働となる場合である。》とまとめている。《以下それぞれの形態について……考察》されているが、第三の形態など歴史を超えて存在しえるはずであるのに、資本の合わせ鏡としての賃労働の検討であることの前提から、その検討は明治期を中心としてなされている。隅谷の見解のもとになされた仕事には、明治史料研究連絡会篇『明治前期の労働問題』／明治史研究叢書第六集（御茶の水書房刊、一九七七年改裝版）や、「明治前期における大阪の絞油業と油絞雇人の労働運動」が収められている北崎豊

二の「明治労働運動史研究」（雄山閣出版刊、一九七六年）などがある。直接の関係はないと思わ

れるが、内山尚三の「建設労働論」（都市文化社刊、一九八三年）も、明治前期から稿を起こしている。

だが、訂正を行わなくてもすむ論をたてる人もいる。「労働の哲学」（田畑書店刊、一九八二年）で、内山節は、《単純労働力商品が成立するには、二つの要件が満たされる必要があった。ひとつは、労働が共同体的におこなわれるのではなく、私的なかたちで存在する、すなわち、私的な労働が確立していることである。第二は私的な労働力の流通する市場が成立していることである。／もしこの二つの要件が満たされるなら、単純労働力商品は、いつの時代でも存在することが可能である。》という。資本の合わせ鏡としてのみ成り立つ賃労働概念の否定である。

内山節は言う。《一般に多くの歴史理論にあらわれている問題点は、資本の歴史をもって歴史総体の分析に代えてしまっていることである。「資本主義発達史」の研究はほとんどが資本と労働の歴史にはなっていないで、資本発達史にすぎなくなっている。ここでは労働者は資本発達史の犠牲者として扱われる。すなわち、労働者自身が歴史の主体としては登場しないのである。》と。そして、そうだった理由を、マルクスの資本論における労働力概念に求める。先に大月版「資本論」から引用した箇所である。

《商業資本↓問屋制商業資本↓産業資本という歴史過程は、流通過程的概念であった資本が、生産過程の概念に変容していく過程をとらえたもの

だ、ともいえるのである。／資本の問題が生産的概念であるとき、それゆえに資本の形態は歴史段階的に考察することができたといってもよいだろう。ところが、マルクスのとらえた労働力商品は流通過程概念である。そして流通過程の概念としての労働力商品は、その成立以降、一貫して性格を変えることはなかった。／共同体的基盤を離れたとき、労働者は、自分の労働力を唯一の財産として労働市場に参入してきた。労働力市場においておこなわれる行為は、単純な商品の取り引きにすぎない。労働者は自分の労働力を売り出し、資本家は必要な労働力を買おうとする。それ以外のいかなる規定も労働力市場にはあらわれてこない。ゆえに、流通過程のなかで労働力の問題を考察しようとするれば、このような単純な労働力の規定しか成立しえないのであり、そうである以上、労働力商品概念は、その成立以降今日にいたるまで、歴史貫通的にならざるをえないのである。／もちろん、労働市場における労働力ではなく、労働者を考察するなら、必ずしもそれは歴史貫通的なものではない。労働者には、彼がいかにして労働力市場に参入するにいたったかという歴史的現実がつけねにつきまとうからである。それは歴史段階によって異なった様相をみせる。》

ここでいう《歴史段階によって異なった様相》は、次のようにまとめられている。《賃労働の（主として近世山村体制の分解のなから）成立以降、労働形態は三つの段階を経てきた。第一の時期を、私は単純賃労働の時代と規定している。

それは産業資本の成立する以前の賃労働である。人間が自分の労働力を単純に商品として売る時代の賃労働であり、その形成は近世期のなかに求められる。第二の時期は、産業資本家のもとでの賃労働の時代である。産業資本家が工場に労働者を集めて生産を実現させる。それは古典的な資本家的生産様式のなかに成立した賃労働である。……第三の時期、現代の資本制賃労働……それは生産のシステム化が実現し、生産過程が、労働過程から独立した展開の論理を獲得した時代の労働である。)

そして、単純労働力商品の形成について、次のように述べている。「東大寺文書」のなかには、七六六年の栗川莊開溝にあたって三〇六人の人夫を傭い、功食、功賃を与えたという記述があるが、それを単純賃労働の古代的形態と呼びうるものであるのかどうかはここで断定することはできない。しかし古代社会においても、たとえば製炭業などは共同体に直属するかたちで営まれている場合と、商品生産、流通を前提におこなわれている場合が並存しているのであり、後者においてはそれなりに私的の労働が存在していたのだと推測することは、それほど困難なことではないであろう。……/いわば、稲作を軸にした自給自足的共同体の外の地帯では、労働は一定程度私的な性格を持っていたと考えられるのである。/もちろん、このことをもって単純賃労働の形成が古代にまでさかのぼると判断するのは軽率である。なぜなら、ここではもうひとつの指針である、労働力の流通

市場の存在が確認されていないからである。ここで述べようとしていることは、単純賃労働は、まづ地方的、局地的、あるいは例外的に、稲作を軸にした共同体から疎外された地帯において発生したのではないかという仮説をたてることであり、また、単純賃労働は歴史的にはかなり長期にわたって例外的に存在していたのではないかということとを頭に入れておくことである。)

さて、冒頭の水野の引用文の続きには、「その日暮らしのため、金になる」仕事の例が挙げられている。「格役労働にかわりに出て金をもらう、町内会に金をもらって掃除をする、動物の屍体の処理など、人の嫌がる汚れる仕事や力仕事。又は町角で芸をして金をもらう(歌舞伎のはじまり)、行人(てきやのはじまり)、また竜安寺の石庭や銀閣寺の庭も設計は坊さんだが工事はこの人々がやった。」——これらの中に、内山という単純賃労働とみなせるものがあるだろうか。あるとすれば、訂正は行わなくても済むことになる。しかし、まだ断定できる段階ではないようである。ここでは、あながち的はずれではなかったことを確認して満足することにしよう。

これまで「労働者こそ労働者らしい労働者」ということの根拠を探るために、稿を進めてきた。根拠として「身ひとつで、額に汗して稼ぎ、生きているからだ」と簡単に言うことができたかも知れない。しかし、それは労働者の原イメージの一つでしかなく、山谷や釜ヶ崎の労働者だけが占有するものではない。水野の「労働者の歴史」の記

述の進め方や船本の「文学的な表現」は、もっと別のもの、文化、あるいは伝統ともいえるものをつなかりを視野にいれているように思える。

古くからある職業集団には、それ特有の雰囲気、らしさ、がある。その「らしさ」は、外からの視線と内からの自己規定の相互作用の中で形成され続ける。山谷や釜ヶ崎の労働者集団にも、「らしさ」はある。その「らしさ」は、もちろん現在の集団から探り出せる。だが、その源流を確定しなければ、「らしさ」を「らしさ」たらしめているものは理解できないのである。隅谷らに依れば、明治期以降の、せいぜい江戸期中期以降の農村あるいは都市下層部分が源流ということになるであろう。内山に依れば、少なくとも中世期にさかのぼり、水野の仕事を加味すれば、労働と差別がクロスする都市下層労働者という源流にたどりつく。いうなれば、「都市下層賃労働者」は、支配と都市の発生以来存在するもので、人的・地域的流動性は高いながら、「らしさ」が外からの視線と内からの自己規定の相互作用の中で形成されることに担保され、一定の「らしさ」を伝統的に伝えてい、と仮説される。隅谷らのいう賃労働者は、かかる意味では後発的であり、別様の「らしさ」を形成している、とみなされる。

まだまだ、「労働者らしい労働者」の根拠は十分に明らかにされていないが、途中経過的報告として提出する。

(まつしげ・いっお/釜ヶ崎資料センター)

釜ヶ崎夏祭り活動報告

パネル展示の内容と参加報告

〔西日本支部事務局長〕

大阪・釜ヶ崎では、去る八月十二日から十五日にかけて「第19回釜ヶ崎夏祭り」（十二日は前夜祭、十三日より本祭）が行なわれ、寄せ場学会も西日本支部として参加した。

参加に至る経緯には少し込み入ったものがあり、西日本レベルではすでに説明済み（九月一日付「西日本支部通信」）でもあることから、ここでは紙幅の都合上、割愛する。来春発行の「寄せ場」第四号で詳述の予定。また夏祭りの模様についても同誌でふりたい。ここでは学会の活動の報告と、各人の参加報告の記録を行なうにとどめる。

（一）パネルの内容

西日本支部は「労災と外国人労働者——海外と日本——」と銘うったパネル出展を行なった。

近年、外国人出稼ぎ労働者の労災が目立って増えていることに注目し、日本だけでなく海外における外国人労働者の実態にもふれることで、現在寄せ場が直面している（アジア人出稼ぎ労働者）（労災）のふたつの問題を、世界的な状況とリンクしたいというのが狙いだった。

海外における外国人労働者の労災状況という点に

ついでに、資料にあたる時間が充分にとれなかったため、実際にはほとんど展開できず、たんに海外の外国人労働者事情に終わってしまった感がある。とはいえ、それでもひじょうにユニークな企画だった考える。

パネルは、A3版画用紙にマジックで概説を記述し、部分的に新聞記事・雑誌・書籍からの資料コピーを添付したもので、主に若手メンバーの尽力で完成した。全三十八枚に及ぶ。大作ではあった。

パネルの各テーマは以下のとおり。
（1）日本におけるアジア人出稼ぎ労働者の労災の現実
および補償差別

- （2）ベルリンの壁と外国人出稼ぎ労働者
- （3）イギリスにおけるカラーード移民労働者
- （4）外国人労働者のフランス
- （5）イタリアの「不法就労」者の現状
- （6）ソ連・東欧におけるベトナム人の就労状況
- （7）アラブにおける外国人労働者
- （8）シンガポールにおけるタイ人労働者の死
- （9）ホンコンのベトナム難民とフィリピン人のお手伝いさん

（10）日本人もほんの60年ほど昔「外国人出稼ぎ労働者」

だった——谷譲次「めりけんじゃぶ商売往来」より

（11）明治にフィリピンへ行った日本人移民の様子——織田作之助「わが町」を読む

（二）参加報告

八月十八日、支部は夏祭り反省会を持った。ここでは、（1）参加の経緯について、（2）各自の参加報告、の二点が討議された。

（1）は来年度の年報でふれるので略。（2）については、参加する以上は漠然とその場にいるのではなく、何を見、何を感じたかを記録するところから各自の関心を深め、またそれを確認しあおうという意図で行なわれた。参加者の発言は以下のとおり。なるべくナマの声を伝えるため、報告者としてはそれほど文章を整理していない。

A（学生・男）——飛田本通りに続く商店街で在釜ヶ崎二十年の人と酒を飲んだが、意外にも、その人は夏祭りのことをよく知らなかった。また商店の雰囲気などを見ると、祭りとはほぼ無縁に日常が送られているのも意外だった。

現場監督みたいな人と酒を飲んでいたのだが、その人がトビ職と思われる人と口論になった。現場監督は「アンコ」という言葉を、日雇いのなかでも野宿しているなどマイナスイメージを表すものとして、使うことを嫌っていた。これに対してトビ職人は、誇りを込めるような感じで「自分らはアンコだ」といっていた。

次回からはきちんと自分のテーマを見つけて参加したい。今回は遊びだけのようになんて感じになんて

った。

B (院生・男) —— 今年のぼくの方針は、でき
るかぎりピタッと祭りに参加しようということ。ヤ
グラの建て込みから最後の片付けまで全部付き合っ
た。それがいまのぼく自身の、釜ヶ崎への関わり方
を考へることにつながっていた。

祭りでは屋台をやった。そういうことをやってい
ると、それに一生懸命になりすぎてしまい、A君の
ように、一人の労働者と話す時間がなくなるのだが
……。

弁当も売った。四百円。労働者から、高いという
声もあった。そういう人の前で「弁当いかですか」
といっている自分は何なのだろうか。また盆踊りに参
加する労働者が少ない。とくにテンポの早い河内音
頭。いったい、これは何なのか。名目上、夏祭りは
労働者の祭りだが、踊りや屋台を見ると、本当に労
働者の祭りになっているのか。だが、どうしたら
いいかわからない。

十六日の片付けのときにわかったことだが、ステ
ージの横に一人の死者がいた。六十歳ぐらいで、話
によるとコチコチに硬直していたというから、最終
日の十五日にみんなが踊って花火を上げてたときに
は死んでいたわけだ。医療連をはじめ、みんなショ
ックを受けてた。祭りの最中に、けっこう楽しく踊
り、弁当を売ってた自分を考えると、複雑な思いが
ある。

C (学生・女) —— A君が現場監督のような人
と話していたとき、私も一緒にいた。その人は「自
分もいつかアンコになるかもしれないが、ああはな
りたくない。リコウなやつは、ああはならない」と

いった。野宿者などを指しているのだと思って、
「病気などで働けない人もいるのでは」というと、
「病院へ行けばいい。金も福祉から出るじゃないか」
という返答だった。彼は「日雇いは一人一人できみ
しい」ともいっていた。

ドヤはもっとゴミゴミしてると思ったが、ビジネ
スホテルがバーンと建っているので驚いた。物価も高
い。だからドヤに帰るしかない。そこでみんなは祭
りに楽しいものを覚えるのではないか。私の子ども
の頃の地藏盆みたいに。

盆踊りには労働者が少ないというが、西成に住ん
でいるような人が参加してる。日雇労働者、日雇労
働者以外と分かれるのでなく、一緒にやっているのは
いいと思う。

屋には新世界を歩いた。「女の人が立っている」
とかいわれたのでドキドキした。おっちゃんがあ
ーロン茶をおごって、話しかけてくれるのだが、話
せなかった。

D (学生・女) —— 一日めと三日めに参加した。
こちらが一人にいるときは、ほとんど話しかけられ
ることはなかった。二人連れていると、「おれは予
科練のとき——」と話しかける人や、すもう大会で
もらったスイカをくれたり、タオルをかけてくれた
りする人がいた。

女が一人だと危険と思われるけど、どうも
二人のときのほうがセクハラのようなことをいわれ
る。「ねえちゃん、ええケツしてんな」とか「キス
して、キスして」とか。「もし気が向いたらばくと
ブルに行きませんか」という人もいた。
警戒心とかはなかったが、会話がうまくいかない。

自分の育ってきた環境との違い、文化ギャップがあ
るのか。ただ、釜ヶ崎に慣れたのか、祭りから帰っ
た当初は、深閑とした京都の夜のほうが異様に感じ
られた。

E (学生・女) —— 三日間、さまざまなおじさ
んの相手をした。二日めはDさんがいなくて私一人
だったから気を張っていたが、みんな何もいってこ
ない。そこで三日めは、最初二人で歩き、のち一人
ずつになって、話しかけられるかどうかを試してみ
た。結果は、やっぱり二人でいると話しかけられ、
一人では話しかけられなかった。

「ええケツしてんな」とかいわれるのは決して好
きではないが、それは嫌らしいというより、コミュ
ニケーションしたいというのが最初から伝わってき
てる。いちばん接触しやすいのが女の子ではないか
「キスして」といえば話しかけられる。直接おしり
をさわられたりはしなかった。

F (学生・男) —— 最初は「おーッ、これが釜
ヶ崎の夏祭りか」という気持ちだった。

祭りの最中も、三角公園のテレビの下にいた人た
ちが、わりと多かった。この人たちは祭りが面白く
ないのだろうか。あるいは祭りが労働者のためにな
っていないということなのだろうか。この人たちが
入れない夏祭りは何なんだろう、などと考えた。

学会のパネルだけ、漢字に読みのルビがふってな
かった。医療連などは、いままでの活動を生かして
パネル展示をやっていた。学会も、そういうふうにな
したらいいと思う。それから、わいせつな言葉を安
易にコミュニケーションの言葉と言ってはいけない
んだらうが、そういう面もあるんだなと思った。

最終日の夜に、すでに一人死んでいたというの、深刻な話だと思う。ダイレクトに、人間が生活しているんだなという感じ。祭りでなく、もっと日常の場なら、いろんなことがあるんだろうな、と。

G (自由業・男) —— 今回、学会のパネルは他のどこよりも字が多くて込み入ってたが、労働者はよく読んでくれて、好評だったと思う。以前Jさん(後出)が「学会が祭りに参加するのは、学会にとっての意味だけでなく、祭りの風景を変えていくという意味も持つ」と言っていたのを思い出した。去年の祭りでは、なぜか警備をやったので、公園

の入り口で外ばかり見ていた。今年はずを向いて、多くの人と話すことを目標にした。ただ、祭りの場だけでは突っ込んだ話でできない。労働や生活のさまざまな局面を、まだまだ感じていかないと。

H (研究者・男) —— 七、八年ぶりに四日間完全参加した。そして、なんと自分は祭りを楽しまな

いんだろうと思った。個人的な話だが、つれあひも来ていて、彼女は祭りというだけで楽しんでいる。自分との違い。

祭りから距離を持っていて労働者の目が、自分にあるのを感じる。「こんなに楽しまないのに来ることに何の意味があるのか」と思いつつ来た。むしろ越冬のほうが緊張感を持って参加できる。

Gさんのいうように、労働者と話していて突っ込んだ話にはなりにくい。意見の違いは歴然としている。ちょっとやそつと話しても壁は越えられない。たまたま顔見知りの労働者と朝鮮人についての話になって、いつもなら笑ってすまるところが、今回は面白くないという思いがあったせいか、最後まで

いってやれという気になって、ちょっとケンカごしになって話した。それはそれで面白かったが。つれあひは、他の祭りに比べて釜ヶ崎の祭りには活気があるという。そうかもしれない。

I (日雇労働者/研究者・男) —— 私が最初に釜ヶ崎の夏祭りに来たのは、まだ第一回めか二回めのときだった。当時は照明もなく、ほとんど真っ暗ななかですもう大会をやるくらいだったと記憶する。夜店はカキ氷とスイカだけで、ヤグラも小規模だった。参加しているのは労働者ばかり。釜ヶ崎生協の子どもたちが少々いただけだった。

現在は、労働者そのものの参加が減ったのではない。むしろ少々増えているかもしれない。目新しいことは、支援の人びとがたくさん来るようになったということだ。それは祭りが、労働者の団結を固める場から、釜ヶ崎における理解と協調の場へと変わっていったことを意味するのではないか。

さっき出た「アンコ」の呼称についていえば、自称では開き直り、他称では差別的。自称の場合でも自分を一段下げ、そこに沈澱してとどまるのではなく、そこから開き直って突き上げていくときに、「アンコ」は自覚的な呼称となる。

J (研究者・男) —— 祭りに参加するようになって十年ぐらいたつが、Hさんと同じく、ぼくも入っていない。人間。今年の祭りが変化してるとは思わないが、たしかにIさんのいうように、祭りの意味が変わってきたという点もあるだろう。ぼくは今年も本屋をやったが、一人で何千円も買う人がいる。付き合いで買う人もいるし、自分の文化的意識を確認したい人もいて、いろいろだ。

K (研究者・男) —— 釜踊りを見ると、毎年同じ人がいる。釜ヶ崎の外の地域から、踊りのために来る人、陶然と踊る人。この人たちが、踊っているとき、その踊りの輪を外から眺めている労働者をどう見ているのか、そして一緒に踊っている労働者をどう見ているのか、それがいまだにわからない。この人たちと釜ヶ崎の関係は、どうなっているのだろうか。

パネルは、もちろんやつつけ仕事という前提はあるが、ひじょうに面白いものだと思う。今回のテーマから手がかりを得て、広げていくこともできるのではないか。

それから「ふるさとの家」が行なう慰霊祭について、ある労働者が話しかけてきた。「壇上の写真の人びとに対しては、おれは本当に尊敬している。だからお祀りに来た。しかし、そこでキリスト教が宣伝活動するのは許せない」と。その人は、神父さんのところへ話をしに行った。

あとで神父さんと話したら、「私はいつも思うんですが、最低、キリスト教と仏教と神道の三つが集まり、文案も出し合って検討して、合同でやれたらいいのではないでしようか」という。ぼくは神道はどうかと思うけど、そういう形態もいと思う。いずれにせよ、宗教・信仰の問題は重要だと感じた。

L (前出) —— 「ふるさとの家」が出すパネル展示に理解が深まればよいのではないか。宗教行為どころかというより、釜ヶ崎のなかで活動している団体の、その内容が出ているということだ。

会員の研究動向

新たに「研究動向」のコーナーを設けました。とりあえずは他者の仕事が見えるということで、会員間の交流に役立つのではないかと思います。将来的には設問内容も工夫して、研究・調査・表現活動の刺激剤として、あるいは共同研究へのステップとして、このコーナーを機能させることができるとも考えています。

今回はパイロット版として、西日本の会員二十数名にアンケートを送ったところ、左の四名の方からご回答いただきました。今後も往復ハガキでお尋ねすることがあると思いますが、なにとぞご協力くださるようお願いいたします。

設問項目は次のとおり。

- ①最近発表された論文・意見などのタイトルと掲載誌
 - ②最近行なわれた学会・研究会における発表のタイトルと発表場所
 - ③コメント（発表論文について、あるいはそれとは別に、最近とくに興味・関心をもっておられることなど、何でも）
- 掲載はアイウエオ順。敬称は略させていただきますました。（「通信」編集部）

青木木 禾乃田力

- ①「寄せ場と在日外国人——外国人労働者問題への一接近」『解放社会学研究』4、一九九〇年三月

- ②「都市下層と在日外国人」関西社会学学会第41回大会重点報告部会、一九九〇年六月
- ③最近の関心「日本の寄せ場とアジアのスラムの環流」

池田 浩治十

- ①「ある日雇労働者の生と死——挽歌にかえて」『寄せ場』第3号、一九九〇年五月
- ②「第三世界・日本・寄せ場そして私たち」笹島労働者会館5周年記念集会、一九九〇年九月三十日、名古屋働く人の家（これは「学会」ではありませんが、一応……）
- ③西日本支部のグループ研究「寄せ場の周辺」は発起人（？）下平尾さんが燃えていますので、きつと充実したものになるでしょう（なつてほしい、ならねばならぬ、なることができる）。

牛島島 吉嘉信田

- ①全くありません（かつて「学会報」2号に拙文を掲げて頂いたきりです）。他の方の文章を読ませて頂いております。小生、目下（情けなくも）、福岡の（寄せ場）とどう関係を持つのか、なかなか実行に移せません……。
- ②同右。むしろ、私にとりましては、どうしたら学会に出席できるか!? が焦眉の課題です。——皆さんと会いたい!
- ③すでに読まれたかもしれませんが、ついこの間、横山源之助の「下層社会探訪集」（立花雄一編、社会思想社・現代教養文庫）という本を買いました。差別的表現があると書かれてありますが、彼

の「下層民」観に学ぶこと大と思います。

野野口 道彦

- ①「部落差別と解放の戦略」「社会問題」学文社、一九九〇年十月（刊行予定）
- 「エスニック・スタディの必修化と新保守主義」『解放社会学研究』第4号、明石書店、一九九〇年三月

年報「寄せ場」④への

寄稿を募ります

日本寄せ場学会年報「寄せ場」の第4号は、来春五月発行の予定です。つきましては会員のみなさんに（さらに、この「通信」を目にした会員以外の友人のみなさんにも）、年報への寄稿を呼びかけます。

いまだ確固とした実体を現さない（寄せ場学）ゆえに、幅広い領域から刺激的な研究論文、調査報告、発言・意見・記録の寄せられることを期待します。できるかぎり原稿用紙を使用していただけるとうれしいのですが、枚数は問いません。年内に左記へお送りください。

△日本寄せ場学会 事務局▽

東京都杉並区善福寺二一六一
東京女子大学 松沢研究室気付

▽九月の運営委(広島)において、十一月に予定されている「即位の礼」「大嘗祭」に対し、学会として反対声明を出すことが決まりました。天皇家関係の儀式の強化、公安警備の日常化、マスコミの「皇室大好き」報道——それは寄せ場や日雇労働者にとりまく状況においては、差別と排除と隔離の強化であり、寄せ場をとおして天皇制を見ることによって、天皇制の意味、日本社会の抑圧状況があまりにも明らかになってくると考えます。

▽運営委は、反対声明の文案作成を西日本支部に任せました。西日本支部は九月十五日の例会で、反対声明を学会の外に向けて広くアピールするため、またこれを機会に理論蓄積を図るため、十月の例会をこの問題に関する討論学習会に振り替えることを決めました。題して

「即位の礼—大嘗祭」に異議あり！——寄せ場をとわし
て考える

です。日時は十月二十一日、午後一時三十分より。場所は京大楽友会館。同志社の田中真人さん、京大の池田浩士さんらに、討論のための提起をお願いすることになっています(下記参照)。当日は会場設定を十二時三十分から行ないます。お手すきの方はこの時間にきていただいて、お手伝い願えたらうれしいのですが……。

▽山谷労働者会館が落成しましたが、ふれる余裕がなくなりましたので、次号でまとめて紹介します。

日本寄せ場学会主催/討論学習会

10.21 PM 1:30~

「即位の礼—大嘗祭」に
異議あり！

——寄せ場をとおして考える

問題提起／「即位儀礼と国民」
田中 真人さん(同志社大教員)
「寄せ場と天皇制」
池田 浩士さん(京都大教員)
「釜ヶ崎『暴動』と天皇制」

日本寄せ場学会西日本支部

場 所／京大・楽友会館 1階

(左京区吉田、☎075-751-1100)

京阪「丸太町」下車徒歩10分、またはバス「近衛通」下車すぐ東

参加費／500円